

博士課程教育リーディングプログラム 事後評価結果

機 関 名	早稲田大学	整理番号	R04
プログラム名称	実体情報学博士プログラム		
プログラム責任者	須賀 晃一	プログラムコーディネーター	菅野 重樹

博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価

[総括評価]

概ね計画に沿った取組が行われ、一部で十分な成果がまだ得られていない点もあるが、本事業の目的をある程度は達成できたと評価できる。

[コメント]

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、学びの場としての中核をなす「工房」を設置し、マルチラボディシプリンの枠組みによる共同プロジェクトや各種実習プログラムとの一体的な運用によって「先見力、構想力、突破力」を涵養する仕組みは、効果的で優れており評価できる。また、産業界の経験を有する多数の教員を配置し、学位の質保証として3回のQEに加えて複数のプロジェクト企画審査を実施するなど、外部審査員を加えた多面的な育成や評価の体制が構築されていることも評価できる。一方、実体情報学の明確化については、学位論文内の論述を基に実体情報学の概念がまとめられているものの、教員及び学生間における学問としての理念の共有やその体系化を図るにはプログラムの今後の継続発展を前提とした研究事例の蓄積が必要であり、その実行が期待される。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、多数の学生が工房での活動や海外インターンシップ等を通じた多種多様な人材との交流により、俯瞰力や突破力が育成されたと実感しており、平成30(2018)年度までの修了者18名中12名がスタートアップを含む国内外の多種多様な企業に就職するなど、本プログラムの目的を実現している点は大いに評価できる。また、実践的な教育や厚い指導体制によって人的ネットワークが充実し、キャリアパスの多様化につながっている点は評価できる。5年一貫制博士課程修了者の活躍を把握し実体情報学の発展を図る仕組みとして、「一貫制博士稲門会」(OB会)を発足させた点も評価できる。

事業の定着・発展については、工房の継続維持の決定や、全学に波及する「コース制」による5年一貫の教育体制を構築した点は評価できる。しかしながら、コース成立の根幹をなす優秀で多様性のある学生の確保は喫緊の課題であり、早急な対応と多大な努力が求められる。特に、平成30(2018)年度以降の入学者は極めて少なく、機械系と情報系を融合俯瞰して気付きとセンスを得るといふ本プログラムの最大の特長である創発、共創の場の提供が困難となる懸念がある。博士後期課程への進学及びプログラム進入者数の増加施策を実施しているが、支援期間内において学生数の減少を食い止めることはできなかった。更なる全学的な取組を進めるとともに、本プログラムが持つ魅力と実績の情報発信が国内外の学生に響くよう、広報活動の一段の工夫と努力が求められる。あわせて、学生が安心できる経済的な支援策の提供についても更なる改善が期待される。

事後評価結果案に対する意見申立て及び対応

機 関 名	早稲田大学	整理番号	R04
プログラム名称	実体情報学博士プログラム		
プログラム責任者	須賀 晃一	プログラムコーディネーター	菅野 重樹

意見申立て内容	意見申立てへの対応
<p>【申立て箇所】</p> <p>(第一段落)</p> <p>リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、学びの場としての中核をなす「工房」を設置し、<u>プロジェクトベースラーニングによる各種実習プログラムとの一体的な運用によって「先見力、構想力、突破力」を涵養する仕組みは、効果的で優れており評価できる。</u></p> <p>【意見及び理由】</p> <p>1. コメント 1～4 行目</p> <p>「工房」の設置は、通常の大学において学科・専攻および研究室間の壁が高く、実質的な連携が難しい中で、教員間の親和性が高い本学の校風をさらに発展させ、事後評価ヒアリングでも強調してご説明したように、複数のラボローテーションを効果的に実施できるユニークな仕組みとなっています。本プログラムの大きな特徴がこの「工房」であり、一般的なプロジェクトベースドラーニングとは異なり、工房における学生同士のインタラクション、必修科目となっている分野横断的な共同プロジェクトの展開をはじめとするマルチラボディシプリンが中心となっています。この評価に関して、以下のように追記をお願いいたします。</p> <p>-----</p> <p>リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、学びの場としての中核をなす「工房」を設置し、<u>マルチラボディシプリンの枠組みによる共同プロジェクトや各種実習プログラムの一体的な運用によって「先見力、構想力、突破力」を涵養する仕組みは、効果的で優れており評価できる。</u></p>	<p>【対応】</p> <p>以下のとおり修正する。</p> <p>リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、学びの場としての中核をなす「工房」を設置し、<u>マルチラボディシプリンの枠組みによる共同プロジェクトや各種実習プログラムとの一体的な運用によって「先見力、構想力、突破力」を涵養する仕組みは、効果的で優れており評価できる。</u></p> <p>【理由】</p> <p>該当部分については事実と齟齬がなく、より正確を期するため、上記のとおり文言を修正する。</p>

【申立て箇所】

(第三段落)

特に、平成 30(2018)年度以降の入学者は極めて少なく、機械系と情報系を融合俯瞰して気付きとセンスを得るといふ本プログラムの最大の特長である創発、共創の場の提供が困難となる懸念がある。博士後期課程への進学者数の増加施策を全学で取り組むとともに、本プログラムが持つ魅力と実績の情報発信が国内外の学生に響くよう、広報活動の一段の工夫と努力が求められる。

【意見及び理由】

2. コメント 20 行目

学生数が減ったこと、増加へ向けた対策が遅れたことは事実ですが、全く対策を行っていない訳ではありません。ヒアリングでご説明した通り、指導教員からの強い推薦、博士進学の意味と効果を具体的にアピールした修了生参加イベントの開催およびプログラム説明会などにより、来年度の進学希望者数はアンケート段階で復調しています。正式なプログラム進入希望者数・合格者数は、出願期間や合否発表(3月4日予定)が今後のため現時点で示せないものの、修士課程進学および博士課程進学審査の準備が始まっている現在において、上述の復調は明らかになっております。元のコメントには、上記の対策について触れられていないことから、以下のように追記をお願いいたします。

特に、平成 30(2018) 年度以降の入学者は極めて少なく、機械系と情報系を融合俯瞰して気付きとセンスを得るといふ本プログラムの最大の特長である創発、共創の場の提供が困難となる懸念がある。博士後期課程への進学およびプログラム進入者数の増加施策を実施しているが、さらに全学的な取り組みを進めるとともに、本プログラムが持つ魅力と実績の情報発信が国内外の学生に響くよう、広報活動の一段の工夫と努力が求められる。

【対応】

以下のとおり修正する。

特に、平成 30(2018)年度以降の入学者は極めて少なく、機械系と情報系を融合俯瞰して気付きとセンスを得るといふ本プログラムの最大の特長である創発、共創の場の提供が困難となる懸念がある。博士後期課程への進学及びプログラム進入者数の増加施策を実施しているが、支援期間内において学生数の減少を食い止めることはできなかった。更なる全学的な取組を進めるとともに、本プログラムが持つ魅力と実績の情報発信が国内外の学生に響くよう、広報活動の一段の工夫と努力が求められる。

【理由】

学生確保に対して全学をあげて施策を行っていること及び令和 2 (2020)年度のプログラム進入者数は復調する見込みであることは承知しているが、支援期間内において学生数の減少を食い止めることはできず、また、支援期間終了後の継続性に鑑み、今後は更なる施策が必要であると判断した。この点をより正確に伝えるため、上記のとおり修正する。